出会い（2）

―向陵（旧制一高）時代―

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう（前列中央・1943年）
1923年、岐阜県生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

失われた青春

旧制中学から大学まで、ほとんど止むことのなかった戦争の時代にかかっていたため、その頃の学校生活は、いうまでもなく、ありあまるほど物の豊かな現代社会の学生生活とはおよそ異なるものであった。「欲しがりません、勝つまでは」「天に代わって不義を討つ」、聖戦の名の下に、「滅私奉公」のスローガンを盾にして、第二次世界大戦の悲惨な終末まで、戦争から戦争へと駆り立てられてきただけではなく、「空の要塞」といわれたＢ29の連続爆撃と、恐るべき2つの原子爆弾によって日本全土が廃墟に化せられた敗戦後の生活は、今では想像もつかない混乱と貧困の極みにあった。その十数年間にわたる、わたしの青春といえば、「失われた青春」というしかない。その間に、学生生活らしきものは旧制一高時代のわずか1年8ケ月だけであった。

全寮生活

しかし、そのような波瀾万丈の青春にあって、夕闇に光る金星のようにただ一つ、悲しいまでに美しく、今なお失われることのない思い出は、旧制一高向陵時代の全寮生活であった。というのは、学生生活全体を通じて良き師、良き友と出会う機会がそこで与えられたということである。とくに、どこからも一切介入されることのない、学生の完全な自治による全寮生活。それが与えてくれた、優れた先輩や同輩との日々の交わりは人間の最も根源的な真理への渇きと若き情熱とを沸き立たせてくれた。形としておよそ粗雑なものであったとしても、そのような寮生活なしには、わたしの一高時代の学生生活は魂のないものになってしまったであろう。

明治33年、後に首相にもなった鳩山一郎の入学に際し、男勝りの母春子夫人が狩野校長に面会し、こまやかに自宅の家庭教育の行き届いていること、それに対し、寮生活の不潔粗暴なことを列挙して、一郎の自宅通学を申し出たとき、狩野校長はじっくりと言い分をきいたあと、ただ一言、「入寮を望まれないのでしたら、どうぞ転校してください」ときっぱりいわれたという逸話がある。

夜の寮歌

わたしが寮にいたときも、約1500人の寮生が分宿している4つの寮の建物は、どれも、今なお存続するほどの頑丈なものであったが、その中は、常識では考えられないほど汚く乱雑極まるものであった。その程度や生活習慣は時の経過とともにいくぶん変わってきたであろうが、夜中に寮歌を怒鳴りながら廊下を練り歩き、寝ているものを叩き起こしては、1時間も2時間も説教したり議論したりするストームは日常茶飯のこと。「寮歌いこう！」と誰かが叫ぶと、一斉に「オーッ！」と応え、天井も破れるような大声で夜遅くまで歌いつづける。それに呼応して、幾つかの他の部屋も負けじとばかり歌いはじめる。別のところからは、「うるさい！ やめろ！」と、窓を開けて叫ぶ。しかし、それもコーラスの中に織り込まれてしまい、青春の熱気は夜空に燃え上がる。

落書き

寮の壁といえば、落書きでいっぱいで、毎年全部塗り直す費用は莫大であったという。寮生はもちろんそんなことには無頓着、新たになった壁にまた新たな落書きを始める。それも、習いたてのドイツ語やフランス語、下手なギリシャ語など、また、哲学や文学の名文句を縦やら横、斜めに無茶苦茶に書きなぐる。ときに、落書き論戦も華やか。これも、ひとつの自由教育の素材となっていたのかも知れない。しかし、そのままこれが、トイレの壁までひろがっていたのには、初めて見たとき驚いた。もちろん下品なものは一つもない。高尚な詩や歌、なかなか為になる人生訓、ときに、カウンセリングもどきの勧告まである。それを丁寧にノートにメモして、いわく『黄金文学』を作るのだと意欲に燃えた寮生もいた。これと似たことは、思い出すときりがない。

無茶というか、粗暴というのか、そうした寮生活は、とにもかくにも、鳩山春子ご夫人の教育理念の枠にはとうてい入りようがなかったにちがいない。

教室風景　　夷狄（いてき）の学

当時も、一高には名物教授といわれる先生がおられた。少し前

には哲学を教えておられた岩元禎教授やドイツ語の菅虎雄教授などが知られていた。わたしたちの頃には、阿藤伯海という、これまた奇抜な漢文の先生がおられた。いつも羽織袴という姿で授業をされた。教室というところは聖なる場所であるから、背広などという野蛮な西洋の服をきて教えるとはけしからん、冒瀆の罪である、という主張であった。

ある日、その授業の前に、わたしは慌てて次のドイツ語の宿題を夢中でやっていた。阿藤先生が入ってこられ、扉近くの席にいたわたしをチラッと睨むようにして通り過ぎ、黙って教壇に上がられた。と、開口一番、「今ここで、聖賢の学を始めようとするときに、夷狄（いてき）の学をしている馬鹿ものがいる！」と叱りとばされた。どっと皆が大声で笑い、わたしはすぐドイツ語の本を閉じた。

しかし、わたしたちがドイツ語専攻の学生であることは、先生は百も承知のはず。それを、夷狄、すなわち野蛮人の学と言い切る先生の漢学者としての堂々たる主張に、叱られたわたし自身感動。すでに50年にもなる今だにそのときの光景が思い出されてくる。西欧文化一辺倒の頃であったから、漢学者の先生には苦々しく思う競争心も少しはあったかも知れないが、あそこまで言い切ってしまわれると、さわやかなユーモアさえ感じられた。また、そのような時代に迎合することなく、自身の生き方に徹しようとする確固たる信念には知識人という以上に、求道者の情熱が感じられた。その時は、いつもの羽織袴姿がいっそう光って見えた。このような学道に命をかける人格者は今どこに見出されるのだろうか。

昨日から明日への問い

急速にアメリカナイズされた戦後社会の学校教育では、才能教育は進んだものの、根源的人間教育は貧しくなった。とくに、精神教育において。学校秀才を育てるだけの知育教育だけでは、人間は人形になってしまうか、あるいは、落ちこぼれになってしまう。そこでは、人間が本当の人間（真人）にはなれない。戦後の学校教育としてとくに唱道されてきた、知育、徳育、体育の三つの調和がとれた「全人教育」にしても、個性の乏しい既製品の人間を作ってしまう盲点があったことは否めない。過去は現代を問い、現代は明日に責任をもたねばならない。

明治より100年近い伝統をもつ一高の寮舎は、まもなく、永遠にその姿を消そうとしている。中川宋渕老師とともに、坐禅に精進した「三昧堂（ざんまいどう）」もなくなるであろう。奇異な入寮式で知られていた「嚶鳴堂（おうめいどう）」は、すでに、戦時中の爆撃で消失した。人も家も、すべて形あるものは過ぎ去っていく。しかし、過ぎ去っていくことは無くなっていくのではない。新しいものを生み出していく力に変わらねばならぬ。あたかも、食べ物の形が消えて体を養う新しい血となり肉となるように。創造は伝統に根ざすことなくしてはありえない。創造力なき伝統はもはや屍でしかない。明日をつくるものは、両者をひとつにする「創造的伝統」である（＊＊）。

＊阿藤伯海（1894～1965）
阿藤先生が一高において教鞭をとられたのは、昭和16年から19年の短い期間であったが、古武士と学者をあわせたような風貌と世俗に染まぬ生き方は多くの学生に感化を与えた。その紹介には、清岡卓行『詩礼伝家（しれいでんか）』（講談社文芸文庫 1993）の好著がある。
＊＊古人の跡を求めず。古人の求めしものを求めよ。

LEWIS HINE

The Work of Lewis Hine
1997. 7. 3（Thu.）— 8. 29（Fri.）

PHOTO GALLERY INTERNATIONAL

夏季休館
8月9日（土）— 8月17日（日）

ルイス・ハインは、
アメリカがめざましい工業化を遂げた20世紀初頭に、
社会的な観点から人々をとらえた写真家です。